

【第1回配信資料 (7作品)】 平成25年2月1日(金) 配信

(1) 「絵本江戸紫」(1765/明和2 浪花禿帚子著・石川豊信画)



国立国会図書館所蔵資料でありアクセス数の高いデジタル化資料。江戸中期の女性生活文化を紹介した書籍の上中下巻を収録。女性のファッションとともに、当時の道徳観を窺い知ることのできる資料であり、石川豊信の手による画も貴重。

(2) 「平治物語〔絵巻〕」(第一軸：三条殿焼討巻)(1798/寛政10 住吉内記写)

国立国会図書館所蔵の貴重な古典籍資料でありアクセス数の高いデジタル化資料。本プロジェクトでは、平治の乱の顛末を描いた軍記物語の絵巻物のうちの1巻を電子書籍化。絵巻物の特性を活かして、実物そのものを読むように途切れることなくスクロール型とした。



(3) 上田萬年訳(グリム原著)「おほかみ」(1889/明治22 吉川半七)



明治中期におけるグリム童話翻訳初期の作品、文体や挿絵を通じて浮かび上がる日本の海外文化の受容の一例として貴重な文献。和服を着た動物の挿絵は当時の児童書における和洋折衷様式であり、独特でユーモラスな味わいがある。参考に青空文庫版の「おおかみと七ひきのこどもやぎ」を掲載。

(4) 竹久夢二「コドモのスケッチ帖 動物園にて」(1912/明治45 洛陽堂)

大正ロマンの代表的存在であり、今なお人気を誇る画家・詩人の竹久夢二が子供向けに描いた作品。本プロジェクトでは国立国会図書館デジタル化資料からの挿絵と青空文庫からのテキスト部分を組み込むハイブリッド型を試み、読みやすさと原書の良さを融合。見開きごとに動物のスケッチと対話や詩などの短文の組み合わせで25種類の動物を描く。コドモの心を持ち続ける詩情豊かな夢二独特の世界観があふれ、大人が今読んでも新しい。



(5) 芥川龍之介「羅生門」(1917/大正6 阿蘭陀書房)



多くの教科書に採用され、誰しも一度は読んだことのある国民的名作。本プロジェクトで配信する初版では、あまりにも有名な「下人の行方は、誰も知らない」と結ぶ末尾の文章が異なる文章となっている。読み比べできるように、新字新仮名による「羅生門」を青空文庫から掲載。初版当時の書籍の感触を感じつつ、末尾の一文によって異なる読後感を味わっていただきたい。

〔現代日本文学の翻訳・普及事業第1回対象作品：芥川龍之介短編集所収〕

(6) 芥川龍之介「河童」(1927/昭和2 直筆原稿)



貴重図書として国立国会図書館に所蔵される芥川龍之介の直筆原稿「河童」。同館デジタル化資料としてネット上でも公開されているが、本プロジェクトの試みでは解読の補助となるように原稿と青空文庫のテキストを併載。活字となる以前、推敲に推敲を重ねる芥川独特の筆跡から魂の叫びを辿っていただきたい。

(7) 酒井潔「エロエロ草紙」(1930/昭和5 竹酔書房)

昨年2012(平成24)年、5ヶ月連続で国立国会図書館のデジタル化資料におけるアクセス数ランキング1位を記録した戦前の発禁本であり、当時の社会風俗を知る上で貴重な資料。いわゆる「エログロナンセンス」を象徴する書物であるが、今読むといかがわしいというよりはむしろ微笑ましいほどである。



【第2回配信資料(6作品)】 平成25年2月8日(金)配信

(8) 柳田國男「遠野物語」(1910/明治43 自費出版)

2013(平成25)年に没後50年を迎え、著作権保護期間満了となったこともあり、再評価の機運高まる民俗学の父、柳田國男の代表的名著。岩手県遠野町に伝わる口承説話をまとめた特徴ある版組を、350部限定の自費出版の質感そのままにお読みいただきたい。

(9) 夏目漱石「硝子戸の中」(1915/大正4 岩波書店)

漱石の日々の出来事や回想を綴った小品。題名の「硝子戸の中」とは漱石自宅の書齋を指すとされており、現在発行されているテキストの多くは、原稿研究の成果から「がらすどのうち」とルビがふられている。今回配信する初版では新聞連載時と同様に「がらすどのなか」となっている。漱石の思考にとっての「うち／なか」という命題もさることながら、大正期の空気感を、原書そのままの漱石の文章を通してお読みいただきたい。

[現代日本文学の翻訳・普及事業第4回対象作品]

(10) 永井荷風「腕くらべ」(1918/大正7 新橋堂)



「墨東綺譚」と並んで挙げられた、(現代日本文学の翻訳・普及事業)の第1回対象作品で、永井荷風の代表作のひとつ。大正モダンの中に、江戸の名残りある東京の一角で生きる芸妓駒代を中心に描く。荷風の真骨頂を、味わいある原書そのままに読むことができる。

[現代日本文学の翻訳・普及事業第1回対象作品]

(11) 宮澤賢治「春と修羅」(1924/大正 13 関根書店)

宮澤賢治が生前唯一刊行した詩集。「わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です」で始まる序文を開くだけで賢治の圧倒的な世界観に触れることができる。イーハトーブや銀河鉄道などといった賢治独特のモチーフが随所に現れるのも興味深い。本人の手によるこの詩集は賢治の残した詩的世界への最も優れた入口となるだろう。

[現代日本文学の翻訳・普及事業第2回対象作品]

(12) 宮澤賢治「四又の百合：宮澤賢治童話集」(1948/昭和 23 百華苑)

賢治の没後出版された童話集であり、表題作をはじめ、「雁の童子」「十力の金剛石」「二十六夜」など8篇を収める。この他、実弟の清六氏のあとがきに加え、棟方志功による装丁が素晴らしい。特に、賢治と同じく東北出身の棟方の版画による「雨ニモマケズ」からは、その風土から立ち上がる力強さを感じることができる。



[現代日本文学の翻訳・普及事業第2回対象作品]

収録作品：「手紙」「四又の百合」「雁の童子」「學者アラムハラドの見た着物」「龍と詩人」「ひかりの素足」「十力の金剛石」「二十六夜」(8篇)

(13) 「きしゃでんしゃ」(1953/昭和 28 株トツパン)



「日本ではじめての天然色写真の絵本」である「トツパンの写真絵本」のひとつ。機関車や電車等の乗り物の写真を多数掲載。幼児用の写真絵本であるものの、当時の貴重な写真資料であり、巻末には写真一点毎に鷹司平通氏（交通博物館員）の解説が付されている。国立国会図書館のデジタル化資料で判別が難しい文章部分は、新たにテキスト入力を行った。(写真：菊池俊吉)